

# 日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol. 8 2012年11月1日

## 目次

巻頭語 ..... 羽矢 辰夫

第4回 日本仏教心理学会学術大会のご連絡..... 藤 能成

## 特集

「仏教心理学キーワード事典刊行に寄せて」

1. 透けて、つながって見えてくるように.....井上 ウィマラ

2. 提案を形にさせていただけた、幸せな体験 .....葛西 賢太

3. 本書は利用者の皆さんと共に充実していきます.....加藤 博巳

4. 社会と連携する.....葛西 賢太

仏教心理まんだら 第一回 .....野田 大燈

## ブック リビュー Book Review

野田 大燈 著 『子どもを変える禅道場—ニート・不登校児のために』

千石 真理 著 『ガンを善知識として—ある女性の生還とその信仰生活』

編集後記 ..... 千石 真理 ・ 松村 一生

## 巻頭語

## 仏教と心理学の融合

青森公立大学 羽矢辰夫

日本仏教心理学会の第4回学術大会が12月に開かれようとしています。学会設立の端緒ともいべき集会在奈良の興福寺で開かれたときのことを思うと、ちょっと大げさですが、隔世の感があります。ゆるやかな合意で一致をみた仏教学ないし心理学の研究者や実践者が一堂に会して、単なる研究発表だけでなく、膝をつきあわせて話し合い議論を深めるユニークな学会として、質量ともに充実しつつあると思います。

仏教の形態にはさまざまあって分かりにくくなっていますが、根底を流れる思潮は、意識しないままに孤立した自我を形成することによって生じた苦しみを解決して安らぎを得る、ということです。そのためには、すでに形成された自我のあり方を、苦しみをもたらすあり方から安らぎをもたらすあり方へと成長させなければなりません。そのための方法が瞑想です。言い方を換えると、ばらばらに分離し孤立した自我を主体とするわたしたちの世界観（ばらばらコスモロジー）を、一つにつながり融合した自我を主体とする世界観（つながりコスモロジー）へと成長させるための一つの有効な方法が瞑想なのです。

ただし、瞑想にはさまざまな段階における効用があります。卑近なところでは、集中力をつけたり、こころを落ちつかせるためにも用いられます。過剰な情動を抑えたり、思考の暴走を制するはたらきもあるので、心理療法に応用できる瞑想もあります。社会に適応できる程度に自我が安定すれば、孤立した自我が形成されるにともなってもたらされる苦しみや不安に、かろうじて耐えられるようになります。

仏教は、耐えるのではなく、解決を目指します。苦しみを解決して安らぎを得るということは、単に社会に適応するというだけでなく、人間としてのさらなる成長を意味しています。心理学の研究者や実践者は、人間の精神的成長の可能性を問い直し、どのようにすれば社会への適応を超えて人間が成長できるかという点を仏教に学べると思います。仏教学の研究者や実践者は、仏教

ではほとんど考慮されていない、どのようにすればより健全な自我を形成できるかという点を心理学に学べると思います。自分たちの専門領域だけでは足りない部分を補い合わせれば、両者ともに、人間の精神的成長のプロセスをより幅広く設定でき、生まれてから死ぬまでの全過程において考察できるようになると思います。

#### 第四回学術大会を迎えて

大会実行委員長

藤 能成（龍谷大学文学部教授）

来る12月8日（土）、本学会第四回学術大会を、龍谷大学大宮キャンパス（大宮学舎）にて開催する運びとなりました。これまで3回の学術大会の会場はいずれも関東でしたので、関西では初めての開催となります。

龍谷大学の淵源は今から372年前の1639年、西本願寺内に設置された学寮に遡ります。龍谷大学大宮キャンパスは京都市の中心部、京都駅から歩いて10分のところに位置し、西本願寺に隣接しています。現在の龍谷大学発祥の地であり、明治12年に竣工した本願寺の大教校の建物を中心に置くキャンパスは、長い歴史と伝統を漂わせる落ち着いた雰囲気にも包まれています。

今回、日本仏教の中心地・京都の龍谷大学において、日本仏教心理学会第四回学術大会を開催する意義は、非常に大きいものがあると言わなければなりません。本学会の設立趣意書は、次のように語っています。

深刻な心の荒廃が指摘される現在の状況において、今こそ、仏教と心理学に携わる研究者や臨床家や実践家たちが協力し合い、現代人のための新たな心の理解、癒し、救い、成長への道を模索することが望まれているのではないかと思います。そのためには、仏教や心理学が抱える派閥的な束縛を超えて、ひらかれた心で、それぞれの研究や臨床的実践の成果を発表しあい、学びあいながら、健全なる批判精神を失わずに対話を続けてゆくことが必要です。

現在の仏教界は、閉塞する現代社会に生きる人々の精神の苦悩を切実に向き合い、充分に対応しているとは言えないのではないのでしょうか。人々の苦悩に無関心な仏教界の状況は「仏教離れ」を加速させています。仏教界は今、仏教が本来果たすべき役割を果たせずにいると言えるでしょ

う。仏教が生き生きとした本来の機能を回復し、また心理学が仏教の智慧を取り入れて、より本質への歩みを進めるために、私たち「仏教心理学会」の取り組みは、効果的かつ有効な選択枝の一つです。今回の学術大会を通して、私たち「日本仏教心理学会」の趣旨と願いが、より多くの人々に伝わり、私たちのムーブメントの潮流が新たな段階へと歩み出す契機となることを願って止みません。

第四回学術大会は、大会テーマ「転換期に立つ日本ー仏教心理学の役割ー」のもと、午前10時10分から、カール・ベッカー氏（京都大学こころの未来研究センター教授）より「日本仏教は生き残れるかー仏教心理学の役割と可能性ー」と題してのご講演をいただきます。引き続き11時40分からの『仏教心理学キーワード事典』発刊記念シンポジウムにおいては、『仏教心理学キーワード集』の編者である葛西賢太、井上ウィマラ・加藤博己の各氏からの提言を元に、仏教学の分野より佐々木閑氏（花園大学教授）、また心理学の分野より山中康裕氏（京都ヘルメス研究所所長、京都大学名誉教授）をお迎えして、コメントをいただきます。以上の二つの行事は一般の方々に無料で公開されます。これらは私たち「日本仏教心理学会」から現代社会に向けた提言として位置付けられるでしょう。

午後2時からの研究発表においては、初めての人、海外からの人を含む10名の発表者が、積極的・具体的・刺激に富んだ報告を行います。発表会場での活発な意見交換が期待されます。

また、龍谷大学が設置した仏教総合博物館・龍谷ミュージアムにおける平常展「仏教の思想と文化「インドから日本へ」」に、学会参加者は無料で入館できるように致します（大宮キャンパスより500メートル・徒歩6分、午前10時～5時<8～9日、入館は4時30分まで>）。またこの機会に、京都の街も是非ご堪能ください。

初めての関西での開催となる第四回学術大会が、閉塞する現代社会に対し、清らかで新しい風を吹き込むきっかけとなることを切に願っております。

本大会が、会員の皆様のお心を集め、心温まる出会いの場となり、盛会の裡に進行されることを期待しております。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。お知り合いの方にもお声かけいただき、是非ご一緒にお出でください。それでは12月8日、京都・龍谷大学でお会いしましょう。

## 特集

## 『仏教心理学キーワード事典』刊行に寄せて

透けて、つながって見えてくるように

井上ウィマラ (高野山大学)

キーワード事典で取り上げる項目を最初にまとめたのは、この件で葛西先生が高野山大学の研究室まで訪ねてきてくれた時ではなかったかと思う。その時には律蔵の小品に出てくる仏伝を思い出しながら、ブッダの成道から初転法輪、そして60人余りの阿羅漢たちを「多くの人々の利益と幸福のために」伝道の旅へと送り出していった時系列に合わせて仏教の基本用語を配置していくことを考えていた。これは、編集者の棟高さんのアイデアでより親しみやすいテーマとしてまとめられることになったが、順番としてはそれほど大きな変化はなかったように思う。

心理学関連の用語に関しては、私は精神分析や心理療法関連のキーワードに偏ってしまう傾向があったため、加藤先生に心理学の基礎をカバーしていただけたことは大変にありがたかった。

仏教関連の用語に関しては、もっと多くの執筆者に担当してほしいという気持ちもあったが、予算の関係もあって、私が多くの項目を担当させていただくことになった。私の専門がセラウーダのヴィパッサナー瞑想であることもあって、パーリ文献による仏教用語の解説が中心になっている。日本の仏教学研究になじんできた方には、華嚴や法華など、物足りない思いを抱かれる方が少なくないのではないかという危惧もあった。しかし、書き終えてみて、後の仏教の多様な展開のほとんどが初期仏教のブッダの言説の中にすべて含まれていたのだという実感を強くしている。ブッダが生きていた時代には、ブッダとさまざまな宗教者などとの対話、弟子たちとの対話、そして直弟子同士の対話の中に記されていた諸要素が、ブッダというタグが外れてしまった後で、時代の流れに沿ってそれぞれの地域や文化の中でそれなりに発展してきたに過ぎない。そう言っても過言ではない豊富な素材がパーリ文献によるブッダの言説には含まれているという実感である。

もう一つは、私の生きてきた人生自体が、仏教心理学という新しい領域の誕生に深くかかわっていたのだという不思議な懐かしいような実感があつた。日本の日蓮宗の檀家に生まれ、道元に

出会って曹洞宗で出家して只管打坐を修行し、さらにビルマのテーラワーダ仏教のヴィパッサナーによって人生が救われた。その時には、生涯出家僧として生きていくだろうと自分も周囲も思っていた。ところが、カナダ、イギリス、アメリカなどで瞑想指導をしているうちに心理療法やホスピスなどと出会い、西洋仏教や心理療法の実に多様な流れに触れる機会を得た。

そして、トロントで生まれて間もない赤ちゃんを「祝福してください」と渡されて両手に抱き留めた時、それまで瞑想修行で身につけてきた全てを家庭生活や子育ての中に応用実践してみなければ自分の人生は満たされないかもしれないという思いを抱いた。今の私は還俗してその人生の実験を生き続けている最中なのだが、その決断に後悔はない。実際、日本に帰国して最初に瞑想の指導を依頼されたのは子育て中のお母さんたちや自然体験学校の指導者たちであった。今では大学でスピリチュアルケアの構築を担当しているが、ほとんどのスピリチュアルケアが看取りに特化したものであるのに対し、私の考えるスピリチュアルケアは子育てを含めて生老病死のあらゆる場面に応用可能なものを目指している。こうした私の人生遍歴そのものが自分の担当した記事の中に生きると実感できることは幸いだ。それは、項目の執筆をお願いした諸先生方との出会いについてもいえることであり、深く感謝している。

この事典の出版後、私はマインドフルネスを研究している心理学者たちから招かれて学会で彼らの研究に対するコメンテーターを依頼されたことがあった。私にとっては、学会での発表よりも、その前後における彼らとの交流そのものが楽しかった。アテンションの科学的な研究は、仏教瞑想の真髄をよりわかりやすい視点から理解するためだけではなく、「私」という観念の発生過程そのものを解明するため、「私」が発生するために必須条件である親子という関係性の中で発生している心の響き合いについて理解するためにも大きな貢献をしてくれそうな予感がある。そうなれば、マインドフルネスという仏教瞑想が揺り籠から墓場まで、チャイルド・ケアからターミナル・ケア、グリーフ・ケアに至るあらゆるケアにおいて有用である理由が解明されることになる。それは私にとって、ブッダやフロイトなど人間の心の探求者たちの軌跡が時代の違いを乗り越えてつながりあっていくことに他ならない。

先日、敬愛する神田橋先生の「発達障害は発達する」というユニークな言葉に感銘を受けた。進化心理学や、神田橋先生のようなユニークな視点をキーワード事典の充実のために取り入れて

いけたらと思っている。

ともあれ、キーワード事典を読んでいただいた方々の心の中で、それぞれが信仰する仏教とブッダの言葉との関係が透けて見えてきて、仏教修行と心理学の実践とがつながりあう予感を少しでも感じて頂ければ幸いである。

### 提案を形にさせていただけた、幸せな体験

葛西 賢太 (宗教情報センター)

- ・ 言い出してお引き受けすること

2008年12月、日本仏教心理学会の設立総会があった。この日の講演は、「仏教心理学」の歴史や課題や可能性を示す、刺激的な内容がならんだ。「仏教と心理学とが出会って対話する、これは1世紀前に米国で起こったのとよく似た一つの運動であるから、運動の手助けとなるようなキーワード集を誰かが作ったらよいと、翌2009年の4月に刊行される学会ニュースレター第1号で私は提案した。

「仏教」も「心理学」もさまざまな思想をはらみ、また、「心理学」と呼ばれる中身には実際には医学や看護学や心理療法や社会福祉学の要素も含まれる。互いに食い違うことの多いこれらの言語間の通訳となる本があれば、二大領域はより密接に関わることができる。キーワード集を誰かが作ってくれば助かりますよ、やりませんか、と、まだこの時点はひとつとであった。

運営委員の先生方に提案してみたら、まず企画書を出してみるように求められた。まだ誰かがやってくれるだろうと、私はひとつとだった。企画書に先生方からすぐ返事があり、「よい企画なので自分でやるように」と勧められ、運営委員から井上ウィマラ氏が応援してくださるということになった。心理学をどうカバーするか相談した加藤博己氏も入ることになり、学会の懇親会で意思確認し、企画がスタートした。

企画の中身を詰めていく過程では、アイウエオ順ではなく、ましてや宗派別でもない、さとの過程を想定した現在の第一部の項目の順序が一通りできあがった。

論文のような大項目を掲載した大事典ではなく、最低限の用語を調べるための用語事典でもない。用語と用語のつながりが見える本として、また、アクセスのしやすさを鑑み、一項目あたり

1頁あるいは見開き2頁で完結する体裁を基本とした。また、通常の話義解説である「項目」と、複数領域を架橋する「ブリッジ」を用意した。

仏教と心理学の幅広い領域の両方に通じるのは容易ではない。そのような「仏教心理学者」たちは、おそらく、理解されない孤独を味わってきたはずだ。だから、仏教と心理学、医学、看護学、福祉学などを架橋する「ブリッジ」が数多くある。編者の三人が密に話し込んだだけで、多くの学びがあった。

編集作業は、私の職場である宗教情報センターでやることになった。井上氏のご自宅が関東にあったこと、加藤氏は東京在住であること、そして、春秋社が東京にあり、編集の棟高光生氏にも便利がよかった、などの理由もあるが、ひとつは、編集作業が毎回6時間を越える長時間に渡ったためである。これは喫茶店などでは難しいだろう。この会議室には南伝大蔵経を始めとする国訳の仏典がそろっており、用語を検討しながら、ブツダがその語に込めていた含意を確認するために仏典をたびたび参照した。この作業は、(井上氏の語りをご存じの方には想像がつくだろうが)じつに楽しかった。たとえば、現在の心理療法、とくに喪失の苦しみへのケアにおいて、道徳的説得や単なる虚無主義の諦観ではなく、経典の字義通りの理解でもなく、無常・無我の豊かさを指し示す仏教の魅力が、多くの事例や仏典の記述を通して語られたのである。

いうまでもなく、刊行にあたって東日本震災の影響はあった。まずはスケジュールだ。この年早々に詳細を固め、すぐに執筆依頼をする予定であったのだが、3月11日の東日本大震災で、出版社もその片付けに追われることになった。執筆依頼を用意していたのだが、その直前に震災があり、出版社から発送が遅れてしまったのである。このことで出版が大幅にずれ込むことを恐れたのだが、執筆の先生方のほとんどが、事前の打診を踏まえて、むしろ粛々と予定通りにやってくれた。震災の直後だからこそ、震災のことを語るだけでなく、大切とってきたことをこれまで通りやるのが肝要と実感されたのではないか。本書においても、直接に震災のことを扱った項目はないが、仏教と心理学の社会的意義をより確信と使命感をもって問うようになったことが反映されていると思う。

メーリングリストで900通を超えるやりとりが交わされ、編集会議も6, 7, 8, 9, 10時間と伸び、なかなか体力的にも重たいものだった。編集の棟高氏は、文字通り身を削って仕上げてく

ださった。サンスクリット語、パーリ語、チベット語などを解する彼が細かい仕上げをしてくれたために、多くのミスが避けられた。

最後に、タイトルにも書いたが、よい企画だと思ったら、提案してみることだ。自分が必要だと思う、自分がほしい、という実感は大切だ。そのように感じている本人が、提案し、工夫して、自ら実感している課題をカバーするように取り組むことが、人をつなぐのは、諸分野に共通する真理だと思う。

本書はゴールではなく、スタートのために踏み台とされるべきツール。多くの方々に役立てていただいたら幸いである。

**本書は、利用者の皆さんと共に充実していきます**

加藤 博巳

(駒澤大学・日本大学非常勤講師

東京都公立学校・東京都大田区小学校

スクールカウンセラー)

事の始まりは、平成21年12月12日に武蔵野大学で行われた日本仏教心理学会第1回学術大会の懇親会にて、宗教情報センターの葛西賢太先生、高野山大学の井上ウィマラ先生と3人で、仏教と心理学との関連について議論するための共通知識についての、わかりやすく、信頼できるような用語集を作りましょうと語り合ったことからでした。そして、2年半の歳月を経て、ついに本書が誕生しました。

本書は3部構成です。第1部は「仏教」で、ブッダの悟り・心の分析から、その発展の基本が、第2部は「心理学」で、心理学の歴史、位置づけ・分野、研究法や、基礎心理学の各論から、応用心理学としての健康心理学と臨床心理学、そして、トランスパーソナル心理学までの基本が、第3部は「精神分析・深層心理学」で、フロイトの精神分析、ユングの分析心理学の基本が、まとめられています。仏教の全体像(系譜図)は3頁に(日本仏教は4頁)、心理学の全体像は179頁に、心理療法の全体像は229頁と235頁に、精神分析・深層心理学の全体像は305頁に図で示されています。

また、仏教と心理学・深層心理学間の関連・類似用語は、リンクとして示しました。さらに、

両者を架橋する冒険的試みは、ブリッジとしてまとめられ、当初の予定よりも、一層使いやすく、充実したものになりました。また、単なる学問的記述にとどまらず、医療・看護・福祉等のヒューマン・ケアにおける応用を念頭に置き、現代社会の諸問題に仏教を活かすための項目も盛り込まれています。

本書作成の過程においては、上座部仏教に体験的に精通し、幅広い人脈をお持ちの井上先生と、控え目ながらも絶大な牽引力と実行力を発揮される葛西先生というお二人の編者や、各分野の第一線で活躍されている51名もの執筆者、そして、数多くの執筆者と連絡を取りながら、仏教と心理学との溝を埋め、高遠な仏教の知識を背景に原稿を洗練させ、前面に立って索引を作成してくださった春秋社の棟高光生さんのお力がありました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

さて、こうして振り返ってみると、仏教と心理学とが1冊でコラボレーションした、おそらく世界初の『仏教心理学キーワード事典』は、この分野に興味・関心を持つ者に、仏教・心理学の基本を提示したとはいえ、実は不足項目だらけの未完成品であります。読者の皆さんと一緒に、リンクを充実させ、項目を追加していきたいと思います。本書に必要で、執筆頂ける項目があれば、ご連絡お待ちしております。また、葛西先生が、本書に関する情報提供、意見交換の場として、ブログ <http://bpkeyword.wordpress.com/> を立ち上げられています。ご意見・ご感想をお待ちしています。

## 社会と連携する

### —研究がつながり、広がる楽しみ—

葛西 賢太 (宗教情報センター)

このチームの意図するところは、「日本仏教心理学会」以外の、他の学会や他の団体、社会との連携を進めることである。本学会の設立趣意書にも同様のことがある。「仏教」と「心理学」(医学、看護学、心理療法、社会福祉学等々関連領域を含む)の両領域をつなぐことが、この分野の大前提であるのだから、他の領域との交流・連携は当然のことである。仏教心理学会に参加して痛感するのは、それぞれが最初にこの分野に出会った入り口・枠組みが、のちのちにまで影響を及ぼすということだ。両領域には共通点がある、という素朴な実感から踏み込んで、では具体的にどこがそうだと思うのか、あの人とこの人を組み合わせるとおもしろいの

では、という企画をするのが、このチームの仕事のひとつと思われる。

最初の取り組みが、本学会推薦の『仏教心理学キーワード事典』（春秋社）であった。「仏教と心理学の両領域をつなぐようなキーワード集がほしい、あったらこの学会の役に立つだろう」という、入りたての会員の私の提案を、運営委員会は取り上げてくださり、押し出してくださった。学会は新しい提案をする場であるのだといわんばかりに。

2012年9月の日本心理学会では、複数の部会やポスター発表で「マインドフルネス」に焦点を当てた報告が行われた。聴講し、先生方の工夫や方法論の進展に驚かされた。私たちがどのように関わられるか、役に立てるか、双方にとって実りある関係をどう提案できるか考えた。

日本心理学会では、私たちからも、「心理学における仏教の影響——過去と展望」というワークショップを加藤博己先生が企画され、60名近い方々が参加されて成功裏に終えられた。葛西は「仏教と心理学が会う「運動」としてとらえる観点を示した。越川房子先生（早稲田大学、執筆者の一人）は、寄稿された無我論を開陳、サトウタツヤ先生（立命館大学）は仏教心理学の学史的な位置づけを詳述、コメントの春木豊先生（早稲田大学名誉教授）は心理学会における東洋的行法研究の草分けの一人として研究史を振り返りながらお話しくくださった。続きが期待される。

『事典』がすでにあるので、今後の社会連携はそれを前提としてお話ができる。「仏教心理学を、どこの、どんな専門を持つ、だれとつなげばよろしいか」、『事典』を通してご検討いただき、アイデアをお寄せいただきたい。

## 仏教心理まんだら

### 第一回

野田大燈 老師

新コーナーです。仏教・心理学の理念を社会活動に実践されておられる方にニュースレター編集者がインタビューさせていただき、その思想や活動についてご紹介させていただきます。

記念すべき第一回目は、曹洞宗、野田大燈老師です。先生は香川県高松市生まれ。1974年栗田大俊老師について出家得度。無一文から禅道場建立を決意。1975年、宗教法人「報四恩精舎」を



には、それまで文章を書いたことがなかったのに、一日で作家顔負けの凄い内容の原稿を100枚近く書いた子もいたし、途中で親に謝りたいので今すぐ会わせてほしい、と号泣しながら訴える子供もいます。それから、坐禅の効果ですが、息の仕方が生き方を変える。姿勢が歪むと生き方が歪む。入所当時は、うつむいて胸呼吸をしていた子が、腹式呼吸を体得し、大きな声で読経していくうちに、自信を持って生きていけるようになります。」

千石：

「それは素晴らしいですね。私も内観と呼吸法を合わせて指導しています。呼吸が深くなる、内観にも深く入れる。内観療法は私のライフワークですが、一週間の集中内観となると、なかなか時間が取れないと、躊躇される方もおられます。一度私も3日間の断食内観を先生の道場で受けてみたいです。私の場合は、子供に内観を受けさせて欲しい、と頼まれる親御さんには、必ず母親だけでも、内観を受けてもらうことを条件としています。子供が一週間で劇的な気づきをして、症状が改善することも稀ではありませんが、問題は家庭にあるので、親が変わらないと、すぐ元に戻ってしまう。親と一緒に努力して、反省するのが必要だからです。」

野田：

「うちの場合は親と切り離しています。喝破道場の場合は、子供が虐待されている場合もあり、親が結婚、離婚を繰り返し、連れ子どもと一緒に暮らしている複合家族も多い。子供が非常に混乱しているし、中には親が諸事情で子供に戻って来てほしくないと思っているケースもあるので、道場を出たら自立できるように食事作りも訓練として行っています。」

千石：

「1988年に、入所者の女の子が行方不明になって、その後死亡が確認された事件もありましたが、親は先生を信頼されておられたので、訴訟に至ることもなく、死を受け入れられましたね。」

野田：

「国の養護施設であれば、責任追及など口をはさむ親もいるでしょう。亡くなったAちゃんの場合も、普通であれば、施設の存続は難しいでしょうが、喝破道場は「施設」ではな

いと親は思っているようです。「お寺」に預けるといふ考えが定着しているのでしょう。私は報四恩精舎（四恩：父母・社会・故郷・大自然の恩）の住職ですが、お釈迦様の原点を意識して、この名前にしました。お釈迦様は、葬式、法事をしなかった。生きている人を対象に布教していました。対機説法はカウンセリングの原点です。私はお師匠様に勧められ、禅宗の布教使の資格も取りましたが、お寺で大衆に説教をするよりも、個人の話をよく聴いてそれぞれに合った対処法を取るようになっています。」

千石：

「日本は今、自殺者が年間3万人、うつ病患者が100万人以上という報告もあるように、悩み苦しんでいる人がたくさんいます。その時代に合った方法を用いて生老病死の悩みに関わっていく。これが僧侶として最も大切なことだと思います。だからこそ、私は内観療法の創始者、吉本伊信師を尊敬しています。野田先生は、2005年から2006年まで、大本山總持寺カウンセリング研究所所長にご就任されておられますが、禅カウンセリングについてお聞かせ願いますか？」

野田：

「大本山に修業に来る若者の中にも、うつ病や統合失調症等に罹患している者がおります。それで色々な問題が起こるわけですが、当時はあまりカウンセリングという概念がありませんでした。修行僧にカウンセリングをしていくと共に、これからはお寺で檀信徒さんのカウンセリングをしていく必要性を感じたのです。それで、禅カウンセリングの商標も取り、駒澤大学からスペシャリストを呼んでテキストの作成などもし、禅僧がカウンセリングの技術を習得できるよう、実技と学科が学べる枠組みを作りました。しかし私も、喝破道場の仕事に戻らなければならなくなり、禅カウンセリングのプロジェクトはその後、進展していません。」

千石：

「それは大変残念です。先駆者は色々な問題にぶちあたりますね。それにしても、先生は常に、時代が必要としているものを仏教的視点で捉えられるのですね。今日本ではいじめやうつ病、ひきこもりの他に高齢化に対する不安もありますが、先生の喝破道場ではすでに、高

年齢と若者が生活を共にし、介護を通じて助け合う“ペアハウス・随流荘”の構想が進んでおられるとか。喝破道場には現在どのような方が生活されておられるのですか？」

**野田：**

「18歳から75歳までの入所者が10名とスタッフが6名です。以前と比べ、少子化で若者自立塾は入所者も少なくなって来ていますし、これからは高齢化が更に進みます。ひきこもりの子は、性格が優し過ぎるので、競争社会には適さないが、喝破道場では共同生活ですので協調性も身に着けますし、彼らは平均して動作がゆっくりなので、お年寄りにはちょうど良いのです。これからはお寺の在り方も変わってゆかないと、お寺の存続も難しい。お寺だからこそ、命を助け合う生老病死の施設の実現ができる。全国の仏教各寺院の後継者の方々に、この“ペアハウス”構想を理解していただき、実際的な社会活動に仏教の理念を生かしてほしいのです。」

**千石：**

「これは私個人にも、非常に有難い話です！結婚しない人も増えているし、孤独死の不安を抱えている人も多いのでは。」

**野田：**

「寺でキャリアウーマンたちのお話を伺っていて、ペアハウスのアイデアが浮かんだのですよ。」

**千石：**

「それにしても、先生は得度、修業をされて娑婆に戻って来られた時は住居がなかった。38年前に醤油樽を逆さにして作った庵での生活がスタートだったというのは凄まじいお話ですが、私には醤油樽から、ここまで道場・施設が発展したのが、とても信じられません。何か秘訣はあるのでしょうか。」

**野田：**

「私は今まですべて直観に導かれてここまでやってきましたが、自分のエゴや名誉欲がある時には、ものごとは動きませんでした。必ずと言ってよいほど失敗しました。社会が必要としていることなら、仏様がさせてくれます。」

千石：

「私も、僧侶としての初心を忘れずに、これからも頑張ります。本日は有難うございました。」

### インタビューを終えて

不良少年やひきこもりを矯正させる禅老師というと、どんな厳しい方かと思ったら、柔和で温かいお人柄の野田先生。智慧と慈悲の絶妙のバランスで、迷える若者たちを導く、まさに菩薩行を实践されておられます。私も僧侶として、しっかりと社会貢献をしていきたい、と改めて思わせていただきました。

喝破道場に関しては、以下の著書紹介のコーナーにも書かせていただきましたので、インタビューと合わせてご参照下さい。

千石 真理

(京都大学こころの未来研究センター)

## ブック リビュー Book Review

野田大燈 著

(喝破道場「若者自立塾」塾長・曹洞宗報四恩精舎住職)

『子どもを変える禅道場—ニート・不登校児のために』

大法輪閣 平成20年5月10日 定価 本体1500円+税



「喝破道場」は、四国の高松市の山腹、瀬戸内海国立公園内の五色台、標高400メートルの地にあります。ここでは塾長、野田大燈老師によって、不登校、ニート、引きこもりの子供たちや若者を自立させるための坐禅・食事作法・自立のための訓練などが行われています。

本書は、老師の若き出家の動機から、現在への活動をご自身で綴られた実録です。仏道修行から戻り、一文無しで醤油樽から始まった坐禅道場が財団法人へと成長。自立精神を養うサバイバ

ル訓練法や、生き方を変える坐禅・呼吸法・食事作法の方法。やる気を継続して起こさせるレクリエーション法や、心を癒すハーブ栽培への取り組み等、失敗談や成功事例も盛り込まれ、道場が多くの方に支援され、若者たちと関わってきた実情が生き生きと描かれています。

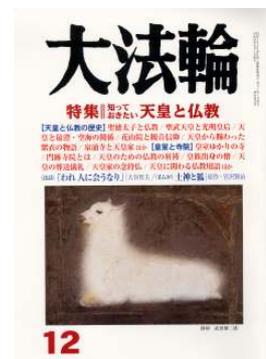
また、道場での生活を振り返るユーモアを交えた随筆や、親や大人に対する直言も仏教者ならではの視点で社会に訴えるものがあります。仏教が社会にどう実践として連携できるのか、具体的に説き示してくれる一冊です。

千石 真理 (自著述紹介)

(京都大学こころの未来研究センター・浄土真宗本願寺派僧侶)

『ガンを善知識として一ある女性の生還とその信仰生活』

月刊「大法輪」平成24年12月号掲載 定価 840円 税込



今や日本人の二人に一人がガンに罹患し、三人に一人が死亡する時代です。ここに、百万人に一人、という悪性の骨肉腫から生還を遂げた女性、堤 静香氏の体験を紹介しました。彼女の症例は、医学臨床的に大変貴重なケースですが、僧侶でもある筆者は、彼女の信仰体験や、現在に至るまでの生き方が彼女の存命に繋がっているのではないかと、という点に着目しました。

有名な『死ぬ瞬間』の著者であるエリザベス・キューブラロス博士は「人は死をみつめてこそ初めて、フルに生きることができる」という言葉を残していますが、フルに生きるとはどういうことでしょうか。必ず死ぬべき存在である私が、今、ここに生きているのはどういう意味があり、ガンであると宣告された時、どのような生き方が選択できるのでしょうか。

病気にかかってしまった時、身体の症状だけでなく、心や精神も一緒に全人的に治療してゆく大切さと、人はガンなどの病気や、人生の一大事に出会った時にこそ、霊性が磨かれ、大切なことに目覚めるチャンスがあるということ、堤氏の実例を通して論じています。

### 編集後記

今号より、学会評議員でシニア産業カウンセラーの松村一生先生がニュースレターのお手伝いをして下さっております。企画、構成、編集など一人するのは孤独で不安な作業ですので、大変有難く、心強いです。新コーナー「仏教心理まんだら」もスタートいたしました。ますます充実したニュースレターを学会員の皆様にお届けできるよう工夫を重ねていきたいと考えております。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。 千石 真理

千石真理先生とともに、ニュースレターのお手伝いをさせていただくことになりました、松村一生と申します。仏教は八万四千の法門があるといえますから、仏教心理を、「親しみ易く」「分かり易く」、言い換えれば、読むことが難行ではなく易行となるように、ご紹介できればと思っております。ご意見、ご感想などあれば、遠慮なくお寄せ下さい。 松村 一生